

があった。長男カルロ、次男フランチェスコである。

長男カルロは容姿共に優れ、熱烈な理想主義と不屈の精神の持ち主で、父親の寵愛と信頼を一身に受けていたが大学生のとき、放縦な生活を追い求めたあげく、家を捨て、無頼の仲間たちの群れに加わっていた。父親はこのような長男の生活に激怒。勘当していた。

カルロは今、望郷の念が体じゅうからこみ上げてくる。父親に何回もわび状をだすが帰国の許可が下りない。そこへ一通の手紙が・・・年老いた父親の代筆として弟フランチェスコから・・・帰国に対して一切の望みを抱くな、石牢に閉じ込め、水とパンだけの日々・・・と書かれていた。カルロは絶望すると同時に父親、弟フランチェスコに対し、怒りを顕わにする。無頼の仲間はカルロの強い復讐心を煽り立て、匪賊の首領に祭り上げ、画して群盗としての一隊ができあがる。

次男フランチェスコによるシェーナ→レチタティーヴォによる独白でこれまでの事態、経緯が歌われる。そして老父モール伯爵をも亡き者にし、あわよくばカルロの婚約者アマリアをも手中にと謀略を練り、自分が領主になろうとする野望が・・・

俺が次男だという自然の過ちをこれでようやく罰してやれる。こんどは親爺に恨みを晴らしてやる。・・・メロドラマ調にどんどん悲劇が増幅してゆく・・・最後、カルロは仲間「義」を通して婚約者アマリアを殺害、自分は刑に服すため去ってゆく。

マッシミリアーノはドイツ・フランケン地方の領主で、フランケン地方のモール（Moor 泥炭地、でいたんち）をも領有している伯爵である。映像を観ているとそんな雰囲気がある。

シラー原作「群盗」いろいろ

台本が「演劇版」「悲劇版」に分かれた。それは、作者自ら言うように「戯曲的制約をいさぎよしとしない戯曲的物語」。つまり、奔放な情熱に煮えたぎった感情が長大（尾ひれがダラダラついて）で反復の多いものであった「演劇版」を舞台用にあらため「悲劇版」とした。それでも尚、昨今に至るまで演出者によって、大筋は変わらないが時間的短縮を目的にした脚色が多くある。そして時代もシラーが生きた 18 世紀後半を 16 世紀後半に変え、社会的配慮をしている。（参考文献シラー名作集 訳者内垣啓一他 3 名白水社）

原作では・・・一体、俺には自然に対して不平を言う権利が大ありだ。俺の名誉にかけてその権利を貫いてみせるぞ！なぜ俺は長男として母親の腹から這い出てこなかったのだ？なぜ一人っ子に生まれなかったんだ？なぜ又自然は俺に、この醜さの重荷を背負わせやがったんだ？よりによってこの俺に？えいくそっ！なぜ、この俺だけが！

次男フランツは家族制度＝長子相続に反発した。

長男カールは生きている時代の社会（封建制度の貴族社会）つまり、キリスト教の独断的な教義に基づく生活のルールに反発（第二幕）、自由を求めた。父親マクシミリアン・フォン・モール伯爵は貴族社会の典型的な堅物な人物であり、二人の息子への配慮が欠けたため悲劇が起こる。

シラーはこれら三人を登場させ自分が生きている社会の矛盾を痛烈に批判した。